

このシートは、展示パネルなどに表れる専門的な用語を簡単に解説するためのものです。項目は五十音順に並んでいます。また、ご自由にお持ち帰りいただいて結構です。

あ いぬやまやき【犬山焼】

江戸時代の大名などが行った^{おにわやき}御庭焼の一種。犬山城主成瀬家によるもので、^{ごしゅう}呉州風赤絵（主に赤色で紋様を描いた陶磁器やその紋様）のものなどがよく知られている。

うすだま【白玉】

円形で扁平な形状の玉。石臼のような形から呼称されている。

えんとうはにわ【円筒埴輪】

土管のように円筒形をした埴輪。人物や物品を表した^{けいしやう}形象埴輪とは異なり、古墳の上に大量に並べて使われることが多い。

えんぱん【円墳】

古墳の一種。上からみると墳形が円形になっているもの。古墳時代でも6・7世紀に地方の豪族の墓として多く造られた。

えんゆうこざら【縁釉小皿】

室町時代ごろに多く作られた、器の縁の部分にだけ釉薬（→P4 右）をかけた皿。

か かいゆう【灰釉】

植物の灰を主原料に作られた釉薬（→P4 右）で、陶磁器にかけて焼くとガラス質になり白色から黄緑色などに発色する。

かいゆうとうき【灰釉陶器】

平安時代に愛知県を中心に生産された陶器。中国陶磁器を模して、日本国内で大量生産された^{せゆうとうき}初期の施釉陶器である。植物由来の灰釉を用いるのが特徴で、長頸瓶（→P2 右）をはじめ、碗・皿・瓶・壺などが作られた。

かがんだんきゅう【河岸段丘】

川の水で削られてできる、河川に沿って発生する段状の地形。

かっせき【滑石】

珪酸塩鉱物の一種で、鉱物としては軟らかい。縄文時代より、玉類などの装飾品として広く利用される。九州では、中世に石鍋の素材として利用された。

くだたま【管玉】

細長い管状（円柱状）をした玉の総称。長軸方向に貫いて孔をあけ、紐を通して使用した。

こうえんぶ【口縁部】

土器・陶磁器の上に開いた部分の縁のこと。

こうはいしっち【後背湿地】

河川の氾濫によって溜まった土が作る自然堤防に対し、河川側から見て裏に発生する湿地のこと。

こがたまるぞこつぼ【小型丸底壺】

古墳時代の前期を中心に、全国的に作られた小型で底が丸い壺。儀式などに用いられたと考えられている。

こくようせき【黒曜石】

石材の一種。ガラス質であり、鋭い断面を活かして石鏃（→P2 左）などに使われる。日本列島で産地が知られており、近隣だと長野県和田峠付近に大規模な原産地がある。

こはく【琥珀】

宝石の一種で、樹木の樹脂が化石化した有機質由来のもの。縄文時代以来、^{すいしよく}垂飾として

使用されるものであるが、日本列島では、原産地は岩手県久慈市・千葉県銚子市が知られている。

さ すえき【須恵器】

古墳時代から平安時代半ばまで生産された陶器。愛知県では名古屋市東部の東山古窯址ひがしやまこやうし群からはじまり、日進市・みよし市・刈谷市北部にかけての猿投窯さなげようなどで盛んに生産された。

せきぞく【石鏃】

弓矢の矢の先端につけられた石器。打ち欠いて作る打製石鏃と、最後に磨いて整える磨製石鏃がある。

せっかく【石核】

石鏃など、打製石器を製作する際の素材となる石片はくへん（剥片）をそぎ取るもとの石塊。そぎ取られたものを残核ざんかくと言う場合もある。

た だいつきがめ【台付甕】

弥生時代後半から古墳時代にかけて使われた土器・土師器（→P3左）で、下部に台を付けて煮炊きの際の熱効率を良くした甕。

たかつき【高杯】

弥生時代以降に作られた、脚をもつ杯（→P2右）の一種で、主に食器として使われたものと考えられている。

たたき【三和土】

赤土・砂利などに消石灰とにがりを混ぜて練り、たたきしめ固めて硬化させたものもしくは技法。日本の伝統的な技法とされ、土間などの舗装に使用された。

たてあなたてもものあと【竪穴建物跡】

床面を掘り下げ、そこに柱や壁を立てて屋根をかけた建物の痕跡。

たぶね【田舟】

そう槽の一種で、民俗事例で知られる、水田農耕時に使用される田舟に形が類似しているこ

とから呼称されている。

ちょうけいへい【長頸瓶】

須恵器（→P2左）・灰釉陶器（→P1左）の一種で、瓶類でも頸部の長い種類を指す。

ちゅうせきていち【沖積低地】

河川によって運ばれた土砂が溜まって作られた平野。濃尾平野などがこれにあたる。

つき【杯】

一般に椀より浅く、皿より深い、口の大きく開いた器。主に食器として使われた。

つきぶた【杯蓋】

杯身（→P2右）とセットで蓋杯あふつきとして使われる、須恵器（→P2左）の蓋。上部にツマミがつくものも存在する。

つきみ【杯身】

杯蓋（→P2右）とセットで蓋杯ふたつきとして使われる須恵器（→P2左）の杯。

つけがろう【付家老】

江戸幕府将軍の指名で各地の大名の家老になった家臣。ここでは徳川家康の指名で尾張徳川家に仕えるようになった成瀬家をさす。

てっさい【鉄滓】

鉄製品を鍛冶炉などで溶かして加工・修繕する際に生じる不純物の塊。

てつゆう【鉄釉】

灰釉（→P1左）に鉄を加えた釉薬（→P4右）で、陶磁器にかけて焼くと茶色～黒色に発色する。

どうぞく【銅鏃】

青銅製の鏃やじり。弥生時代中期～古墳時代にかけて使用された。鑄造ちゆうぞうで作られるもので、この地域では筒状の軸（茎）に断面扁平菱形な身をもつ両翼式りょうよくしきとよばれるものが多い。

どこう / どこうぼ【土坑 / 土坑墓】

大きく穴が掘られた遺構の総称。土坑がつ

くられた理由はさまざまであるが、当時のヒトがある目的をもって築いたもののみを指す。貯蔵穴など特定の機能・用途が判明した場合は、別の名称で呼ばれることがある。土坑墓は、埋葬のために掘られた遺構を指す。また、当時のヒトがモノを廃棄する場合に坑を掘る場合は、廃棄土坑と呼ばれている。

とって・はしゅ【把手】

土器・陶器の外面に付く取手部分である。縄文土器などでは、装飾化することがある。

ななかやしき【中屋敷】

大名や上級家臣が、普段住む居城とは別に主君の城の付近に所有した屋敷の一種。犬山城主成瀬家に関しては、名古屋城下に上屋敷・中屋敷・下屋敷があったといわれている。

のきひらがわら【軒平瓦】

建物の軒先に使われる屋根瓦のうち、凸面を下にする比較的平たい瓦。

のきまるがわら【軒丸瓦】

建物の軒先に使われる屋根瓦のうち、凸面を上にする比較的丸い瓦。

ははじき【土師器】

古墳時代以降に作られた、素焼きの土器の総称。食器に用いる皿類や、煮炊きに用いる甕・鍋・釜類が多く生産された。

はそう【甗】

須恵器（→P2左）の一種で、小型の丸底壺の形に加えて、胴部中央に孔がつけられているものである。孔にはタケ・ササ類など植物茎を挿入し、注口にしたと考えられる。お酒などを注ぐためのものといわれている。

ひかばち【深鉢】

縄文時代を中心に作られた、胴が上下に長く底が深い土器で、煮炊きに使われた。弥生時代には甕と呼ばれる形に変化した。

ぶく【仏供】

仏前に供える食物などを盛る、脚の付いた小型の器。

ふろ【風炉】

茶器の一種で、茶の湯をわかすために炭を入れて火を入れる炉のこと。主に、5月から10月の夏の期間に使用されるものである。

ほうがんそう【包含層】

遺物包含層の略。遺物が含まれる土の層。遺跡に遺物が含まれる過程には、(1) 当時のヒトの活動により道具が残り、その後に風や水の堆積によって埋まっていった場合、(2) 居住や廃棄など当時のヒトの集中的な活動によって形成される場合、(3) 別の場所にあった遺物がその後の自然の営力、もしくは耕作などの人為的作用によって、二次的に形成される場合、がある。特に(2)の場合は、包含層中に多数の遺構の痕跡が含まれている場合が多い。旧石器・縄文時代など先史時代の研究においては、文化層と言われることもある。

ほったてばしらたてもものあと

【掘立柱建物跡】

穴を掘って柱を立て、屋根をかけた建物の痕跡。通常、柱を立てたと思われる穴が、縦横に複数列に渡り並んでいることをもって認定する。愛知県内でも、近年では岡崎市車塚遺跡のように、縄文時代中期から存在していることが明らかとなっている。

ままがたま【勾玉】

C字形あるいはコの字形をした玉の一種で、幅広の一端に穿孔が施される。弥生時代・古墳時代を通じて作られており、日本列島の玉類の代表格と言える。縄文時代の牙製がせい垂飾すいしよくを起源とする説が古くから言われている。

まるがわら【丸瓦】

屋根瓦のうち、凸面を上にする比較的丸い瓦。平瓦と組み合わせて屋根を覆ったものを本瓦葺ほんがわらぶきという。

や やきしおつぼ【焼塩壺】

あらじお
粗塩を入れて焼き、にがり成分や水分を飛ばし、食卓塩にするための素焼きの筒形容器である。泉州（現在の大阪府の一部）に由来した刻印のあるものが主に知られており、江戸時代全般にわたり、流通した。特に江戸時代前半では大名・寺社など、上級階級の食卓・調理に関わるものであるとされている。

やまぢゃわん【山茶碗】

平安時代末期～戦国時代の始めごろまで、東海地方で生産された陶器の一種。名称の由来は、山に行くのとたくさんあることから付けられたという。灰釉陶器（→PI左）の後継とされているものであるが、無釉である。また、焼成時に製品間の融着を防ぐためにモミガラを多用される。碗、小皿、片口鉢などがあり、生産地が5つに大別され、愛知県では

尾張型、東濃型、渥美・湖西型が多く出土する。

ゆうぜつせんとうき【有舌尖頭器】

槍先形の尖頭器せんとうきで、基部に舌状の突起（茎）が付けられるものである。縄文時代草創期の今から1万2,000年前頃の石器とされる。柄を付けて、投げ槍や突き槍として使用されたと考えられる。投擲具とうてきぐとの関係を示唆する研究者もいる。

ゆうやく【釉薬】

陶磁器などの表面にかけて焼くことで、ガラス質の膜となって表面を保護するほか、様々な色を示すため装飾にも用いられる薬品。植物の灰や、砕いた鉱物や金属を混ぜて作られる。

ら りよくゆうとうき【緑釉陶器】

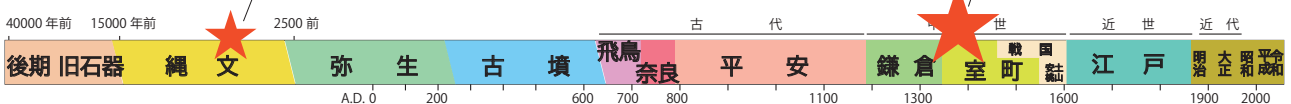
中国陶磁器を模して、日本国内で生産された初期せゆうの施釉陶器である。灰釉陶器（→PI左）との違いは、無色の基礎釉である鉛に、銅化合物を加えることで緑色に発色する釉薬をかけられている点と、焼成した素地の上に施釉されている点である。

各遺跡の展示パネルに、下記のような年表が記載されています。★印は発掘調査で確認された時代を示しています。特に大きい★が、今回の調査で中心となった時代です。

また、展示遺物にも時代ごとに遺物の説明キャプションに色分けをしています。

遺物の多量出土や、遺構群や集落など面的に広くヒトの活動が確認された時代

遺物の出土など、調査で確認された時代



編集
印刷



わたしたちは
あいちの歴史を
掘り起こす
調査研究機関です。

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター